

## 特集 — グレンイーグルズサミットとアフリカ支援

[室井義雄 経済学部教授]

真の自律的發展に向け「非市場社会」の認識を—巨大な貧富の格差を直視して

先の7月6～8日、英国スコットランドのグレンイーグルズで第31回主要国首脳会議(G8)が開催された。同7日、ロンドンの中心部で死者50人以上、負傷者700人を出す同時爆破テロ事件が発生し、会議の成り行きに暗雲を投げかけたが、このG8では、気候変動と共にアフリカ支援の問題が最重要議題として取り上げられた。



2001年3月、ナイジェリア・ラゴス市郊外の市場で(左が室井教授)

なぜ今アフリカ支援か

その第一の理由は、今年が2000年9月の国連総会で採択された「ミレニアム発展目標」(MDG)を見直す年に当たっているからである。このMDGは、貧困・教育・保健・環境などの諸問題について、15年までに達成すべき具体的な開発・発展目標を定めたものである。だが、5年を経た今日でも、とりわけアフリカ諸国の困難性は解消されていない。G8としても、これを無視できないという事情があった。

第二に、主催国の英国にとっては、会議の「目玉」が必要であった。かつてアフリカ大陸に最大の植民地帝国を築いた英国は、同大陸に対する強い関心を持ち続けてきたが、04年2月にブレア首相自らを議長とする「アフリカ委員会」を発足させ、G8に備えてきた。英国がアフリカ連合とナイジェリアなど7カ国を招待したのも、こうした理由からである。

第三に、日本の立場も無視できない。国連安全保障理事会の常任理事国入りを目指す小泉政権にとって、靖国神社参拝や教科書問題などでアジア諸国から厳しい批判が相次ぐ中で、53カ国を擁するアフリカは大票田である。イラク問題などに忙殺される米国の政治的圧力もあって、大盤振る舞いをせざるをえなかったのである。

アフリカ諸国の現状は

それでは、アフリカ諸国の現状はどうであろうか。まず、国際通貨基金(IMF)と世界銀行によって「重債務貧困国」に認定されている42カ国のうち、アフリカが実に34カ国を占めている。これらの諸国では、巨額の債務返済のため、国内向けの開発資金が大きく不足している。今回のG8では、18カ国の最貧国がIMF・国際開発協会(世界銀行の構成組織)・アフリカ開発基金に対して負っている債務の全額(約400億ドル)を帳消しにすること、アフリカ全体に対するODAを毎年250億ドルずつ増額して、10年までに04年実績額の2倍にすることにつき合意に達した。

他方、1日1ドル以下で生活している「絶対的貧困層」は世界で10億9270万人と推定されているが、そのうちの3億1580万人がアフリカ大陸に住んでいる。彼らの多くは、安全な飲料水・清潔なトイレ・医療・電気など、基礎的な社会サービスさえ十分に受けられない状況下にある。

さらに、近年急増しつつあるエイズ感染者(0～49歳)は世界で3887万人と推定されているが、そのうちの64%がサハラ以南のアフリカ地域に集中している。また、エイズによる死亡者は同地域だけで220万人、世界全体の74%に達している(03/04年度)。

経済人類学の発想を

だが、これまでも、とりわけ深刻な飢餓が発生した80年代初頭以降、巨額のアフリカ支援が行われてきたことは確かである。とすれば、そもそも何が間違っていたのであろうか。

まず、開発理論の点で言えば、純粋経済学の無批判的な援用から決別して、経済人類学の発想を取り込む必要がある。換言すれば、需要・供給の法則だけでは説明し切れない、非市場社会の論理を認識することである。

例えば、イスラーム教徒が機械を止めて遥かなるメッカに向かってひざまづくことも、彼らの肉体と精神の健全な維持にとっては、まさに合理的であるということを理解せねばならない。それを経済的効率性の観点からのみ否定する時に、工場労働に対する嫌悪感が生じるのである。

また、「貧困」の概念を社会的暴力の視座から再定義する必要があるだろう。例えば、大規模灌漑計画のために湖底に沈んだ村や強制移住をさせられた住民など、開発が遅れているからではなく、開発の結果として貧困が生じている事例が少なくない。

そして、政治権力と軍事力を掌握しているアフリカ諸国の指導者層こそ、国内における貧富の巨大な格差に敏感でなければならない。片腕や片足を失い物乞いをする路上生活者を直視し、それに疑問を感じる社会的理性を取り戻すこと、恐らくこれが、アフリカにおける自律的發展への最良の近道であろう。

我々を含めて、「思想の貧困」を克服せねばならない。

むろい・よしお＝経済学部教授(国際経済学科)。東京大学博士(経済学)。ナイジェリア国立国際問題研究所客員研究員などを経て現職。主な著書に『ビアフラ戦争―叢林に消えた共和国―』(山川出版社)『南北・南南問題』(同)など。

## ACMコンテストアジア地区予選

## ネットワーク情報学部チーム 2年連続出場

「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」2005年国内予選が7月1日に行われ、ネットワーク情報学部の荒木博志さん(4年)、中村哲也さん(3年)倉品裕多さん(3年)のInspiration Over Flowチームが、大学別11位・チーム別29位の成績でアジア地区予選出場への切符を獲得。2年連続出場となった。専大のアジア地区予選出場は6回目、同一メンバーによる地区予選進出は初。



左から倉品さん、松永教授、中村さん、荒木さん、  
ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト

国内予選には、過去最多の48大学(高専含む)191チームが出場し、同チームは6問中3問を解答し突破した。11月3(木)、4(金)の両日、東京工科大学で開催されるアジア地区予選東京大会(34チーム参加)に向け、「今年こそ、表彰台に」と意気込んでいる。

「最強メンバー」とコーチの松永賢次助教授が太鼓判を押す3人だが、目標達成へのカギは「チーム力のアップ」と口をそろえる。

荒木さんは「一人ひとりのレベルは上がっている」。倉品さんは「国内予選では最初につまづき、立て直すことはできたが、今後の教訓としたい」。3回目の出場の中村さんは「台湾で開催されるアジア大会にも出場して活躍したい」と意欲を燃やす。

## 《留学生からのメール -4-》

### 「学ぶ場」としての大学を実感

ネブラスカ大学 リンカーン校<米>に長期留学中の小川知恵さん(文4)

5月にネブラスカ大学に来て、はや2カ月が経ちました。キャンパスは、大学のシンボルカラーの赤で彩られ、今日も青い空とのコントラストが美しいです。

◇

NebraskaとプリントされたTシャツを着た愛校心の強い学生達。知らない人にもにっこりと笑って挨拶してくれる人々。そんな温かい環境の中で私は生活しています。

◇

先日終えた語学学校での授業は、課題をこなすのに精いっぱいでした。ライティングの宿題やプレゼンテーションのことで頭がいっぱいになることもしばしば……。しかし、やみくもに勉強するだけでは効率が悪くなるのではと思い、休日は、バーベキューやスポーツを思いきり楽しみました。こうした切り替えの早さは、現地学生から学んだことです。

現在、秋から始まる正規授業に向け、いくつか授業を聴講しています。意欲的に授業に参加する学生を見て、大学とは学ぶ場所なのだあらためて実感しました。そんな彼らに刺激を受けながら、来月からの正規授業では、以前から興味があった言語学をはじめ、歴史や社会学の授業を取る予定です。

◇

私の留学は始まったばかり。正規授業では、より充実した楽しい日々が待っていると期待する半面、今まで以上に苦勞することも多いかもしれません。しかし、それらと向き合いながら、一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。



## 《緑地帯》

## 静かな教室

シーンと静まり返った教室に、ペンの音だけが響く。といっても、テストを行っているわけではない。そこそこの冗談だったはずなのに、学生たちは何事もなかったかのように黒板を写している。

うるさい授業よりも、静かな方がずっとまじなことは確かだけれど、何とか理解してもらおうと一生懸命話している最中に、放心した顔つきでじっと座っている学生を見ると、「まったく分からん！」と、はなから拒絶されているようで、なんともいえない無力感に苛まれる。

「単に授業が下手なだけ」という指摘は最もだけれど、こんな私でも、学生がこぞって目を輝かせ、ギャグを言えば、いつでもきちんと笑ってもらえる授業を行ったことが、1年間だけあったのだ。自分ではその頃と同じように授業しているつもりなのに、反応がまったく違う理由がよく分からない。

確かにその学年は成績がよく、半分以上の学生がAをとっていた。けれど、それは原因ではなく結果で、「面白い」からよく聞き、「よく分かった」のだろう。じゃあ何で「面白かった」のか。どうして教師と学生との間に自然なコミュニケーションが成立したのだろうか。それは、初対面のときから感じられた、学生たちの「好感」のおかげだと思う。「好感」をもっている相手の言葉なら、何とか理解しようとまじめに耳を傾け、陳腐な駄じゃれでも笑えるのだろう。

そういえば、最近教師に対して妙に卑屈だったり、逆に馬鹿にする様な態度の学生が目につく。これは私の「好感」が足りないのか？（学生部）